

令和２年度第１回 千葉市史跡保存整備委員会 議事録

１ 日 時 令和２年７月５日（日） 午後２時００分～午後４時３０分

２ 場 所 千葉ポートサイドタワー１２階 第一会議室

３ 出席者 【委員】

青木委員（委員長）、設楽委員（副委員長）、赤坂委員、高橋委員
谷口委員、中村委員

【オブザーバー】

千葉県教育庁文化財課 吉野主任上席文化財主事

【事務局】

（生涯学習部）佐々木部長

（文化財課）佐久間課長、児玉課長補佐、森本主査、須賀主任主事

（加曽利貝塚博物館）加納館長、長原主査

（埋蔵文化財調査センター）西野所長

４ 議 題

「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（素案）」について（諮問）

５ 報告事項

（１）令和元年度事業報告

（２）令和２年度事業計画

６ 議事の概要

「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（素案）」について

事務局案を説明し、事業活動計画、展示・体験計画などについて委員から意見があった。各委員からの意見を踏まえ、構成や内容について再検討する。

再検討については、９月頃の答申を目標とする。

７ 会議経過

【開会】

（児玉課長補佐）

それでは定刻となりましたので、ただいまより、「令和２年度第１回千葉市史跡保存整備委員会」を開催いたします。

私は本日の進行役を務めさせていただきます文化財課 児玉でございます。どうぞよ

ろしくお願いします。

本委員会は本市の公開条例に基づき、公開いたします。議事録は事務局が作成した案をご出席の委員の皆様にご確認いただき、委員長の承認により確定いたします。傍聴人の方はお手元にお配りした傍聴要領をご確認の上、お守りいただきますよう、お願い申し上げます。

当会議は、本年度最初の開催となります。事務局に人事異動がございましたので、先ず初めに職員を紹介させていただきます。

どうぞよろしくお願いします。

なお、本日は、千葉市まちづくり協議会 竹内委員よりご欠席の旨、連絡をいただいておりますが、本会議は、半数以上の委員の方がご出席ですので、千葉市史跡保存整備委員会設置条例第5条第2項により、会議は成立しております。

また、本日は、オブザーバーとして千葉県教育庁文化財課より主任上席文化財主事吉野様と、本計画素案の受託者である株式会社丹青社に出席いただいております。

それではこれより会議に移らせていただきます。会議開催にあたり、佐々木部長より、ご挨拶がございます。

佐々木部長、よろしくお願いいたします。

(佐々木部長)

委員のみなさまにおかれましては、本日はお忙しいところお集まりいただき、誠にありがとうございます。

また、平成27年度から「史跡加曽利貝塚保存活用計画」の策定、「総括報告書」の刊行、「特別史跡加曽利貝塚ランドデザイン」など、多岐にわたりご審議いただきましたことに、厚く感謝申し上げます。

昨年度12月22日に開催した会議では、新博物館基本計画について、皆様からたくさんのご意見を頂戴しました。

いただいたご意見をもとに庁内で検討を行い、「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画」の素案を取りまとめました。

今回の会議では、お手元に配付させていただいた諮問書の写しのとおり、千葉市教育委員会として皆様に諮問させていただきたいと存じます。

今後は秋を目途に、新博物館基本計画案を取りまとめていきたいと考えておりますので、短いスケジュールではございますが、どうぞよろしくお願いいたします。

(児玉課長補佐)

なお、佐々木部長は所用により、ここで退席とさせていただきます。ここからは青木委員長に進行をお願いします。

青木委員長、よろしくお願いいたします。

(青木委員長)

それでは、委員会を開催させていただきます。佐々木部長からのお話のように、素案

についての諮問がございます。

予め計画策定に向けたスケジュール的なことを申し上げます。事務局からあとでお話があると思いますが、資料2の一番最後3ページ目の4、今後の計画策定スケジュール。これは、当委員会に関わることです。

今日の会議後、各委員から出た意見を事務局で集約していただくことになりますが、もしその他に委員からご意見があるようでしたら、7月いっぱいまでに事務局までご提案してください。

その後、8月に事務局が修正案を出して私たちに返却してくださると思いますので、それを目通ししてなるべく早く事務局に意見を返すというスケジュール感で皆様にお考えいただければと思います。

9月の会議の時には答申案となりますので、ご協力よろしくお願いいたします。

庁内での調整やパブリックコメントなどのスケジュールについては、後程詳しく事務局からご説明があると思います。

会議後半で、令和元年度の報告や、令和2年度の計画があります。長丁場になりますが、休憩を適宜入れたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは事務局から素案の説明をお願いいたします。

議題1 「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画（素案）について」

〔事務局説明：資料1、資料2を元に、素案について説明。〕

（青木委員長）

ありがとうございました。今までの全体の議論を踏まえて、基本方針やL I V I N G J O M O Nの問題、施設計画等々を修正して素案を作っていただいておりますが、ご意見ありますか。

（赤坂委員）

前回12月でだいぶ間が空いてしまいましたが、前回の議事録を拝見すると、新博物館構想に係る中身の問題について非常に熱い議論となっていたことがわかります。

しかし、これが今回の修正案に盛り込まれたかは疑問です。前回議論になったことは、縄文時代が原始時代というような、世間に流布しているイメージを一掃するくらいのもので、非常に目標を持ったものだったと思います。

現在の素案を拝見すると、使用されているイラストレーションはまだ原始時代みたいです。簡単には直らないかもしれませんが、これを見ると、今までの議論による修正が反映されたか不安になります。

私は、博物館については専門ではないので、前回もあまり発言はしていませんけれども、せっかくの議論が盛り込まれないと残念だと思います。

本質とは外れた枝葉末節な話をしますと、前回私はラボに関する修正の提案をしてい

ましたが、この修正版を見ても全く修正されていません。「LAB」と書いて「ラブ」なのか「ラボ」なのか。「LABO」と書いてある部分もありますし。

36ページのイラストは、「O（オー）」は貝をシンボルにされていて、本文は「LAB」と書いてあります。混乱を招きます。

（高橋委員）

9ページのSDGsの記載について、大きな目標と個々の博物館に関する部分を対応させていますが、例えば9ページの「産業と技術革新の基盤をつくろう」とある部分を見てしまうと、これは縄文時代が全くそうであったととらえがちです。

2番目の「人や国の不平等をなくそう」は、スローガン自体は高潔なものだし、何ら反対すべき理由はないのだけど、これを縄文時代の加曽利貝塚を考えたときに対応する関係にあるということは、私はおかしいと思います。最近の学界は、そうではないということ言っています。これでは、50年前からの学説と何ら変わらない考え方です。私たちはそういうことを変えようといって対応しているはずですが。

無理やりこのSDGsの対応表に合わせなくていいのではないのでしょうか。合わせることはどこか無理くりな気がして、SDGsがこの基本計画の親規程に見えます。SDGsが親規程だから子も従えとなると、私たちは新しい博物館をつかって、そこで新しい学問の成果を出そうという時に、自らの成長を阻害するような気がします。この辺はこだわらない方がいい。

無理やりあわせようすると、我々が求める縄文文化、あるいは縄文社会像を逆に曲げないといけなくなる。そんなことは学問をしている人間は到底できません。どうなのですかそれは。

（佐久間課長）

SDGsに関する記載は、これまでは「SDGsに則っています」ととどめていました。今回は、少し無理やり感がある形で個別に記載してしまったかもしれません。

全ての項目に合わせる必要はないかと思います。「人や国の不平等」や「産業の基盤」については無理やり感があると思いますので。

（高橋委員）

おっしゃる通りだと思います。ひと昔前までは、ユートピア史観に則って、縄文時代は自由平等、偏りがなかったと、そういうことを盛んにアピールしていましたが、それが50年も続いたところに大きな問題があります。最近はそうではないと。縄文時代は少しずつではあるけれど、複雑化を遂げたのちに、階層化過程、trans egalitarian という言い方をしますが、そう社会が変わっている。そうじゃないと、縄文社会からいきなり弥生時代の階層化社会へランクアップすることはないと。理論的に批判されています。

そこをきちんと新しい理論で埋め直していかないといけないと思います。SDGsの立派なスローガンに引きずられ過ぎます。

SDGsのスローガンが悪いのではなく、それに合わせようすると、新しい博物館を最

新の学説に合うように私たちは考えているのに、逆にこれは昔の学説を踏襲してしまうことが危険だと思います。

これは中村先生のご専門ですが、縄文時代は全く自然環境に優しいことではなかったはずですよ。相当なことを始めているから、それを引き継いできているから現代社会に至ったのです。縄文時代は素晴らしい時代だから戻ろうよという回顧主義は全く成り立たないということは理論的にも証明されています。そのため、そういった形で縄文時代をSDGsに当てはめようとするとうとう無理が来る。これを少し考えてください。

(西野所長)

この部分は私が用意したのですが、高橋委員の無理やり当てはめない方がいいというご意見は、その通りだと思います。

縄文時代の中期に大きな貝塚が出来て、社会が複雑化しましたが、千葉はあまり階層化が進まなかったことが特徴ではないかと考えています。それはまだ議論されていないのですが、素案では「縄文時代から古代の各時代」と書いていますが、各時代に見られる特徴です。

例えば弥生時代を挙げると、2つの弥生文化がクロスするところに千葉はなるわけですけど、それが争わないでずっとあることだとか、古代以降の権力がはっきりした中でも庶民レベルとっていいかわからないところですけども、古墳を作るとか、古代になってもムラの中にお寺をつくるとか、どうも千葉は平和なところ、平等を守ることが見られると私は考えています。

ここで私の意見を主張するのは間違っていますが、考えた背景は以上です。

(高橋委員)

専門的な話をここでしてしまうと、私と西野所長の論争になってしまうので、それは避けます。中期の終わりから加曽利E式期以降の流れを見てみると、それが後期に至る大きな社会変動に実は連結しているんですね。とくに、千葉縣市原市周辺の動きを見てみると、それを置かないことには、なぜ後期社会を迎えていくのかということを説明できないことが山ほどあります。そこには大きな社会変動があるし、社会変動とは何があったのか。社会構造なのか親族構造なのか、あるいは出自・descentなのか、あるいはmarriage systemなのか。ということを細かに私どもやっていて、これは確かに大きいぞといきついているので、それをずっと複雑化過程、social complexityと欧米では盛んに議論されているけど、コインの裏表の関係で、そこにsocial stratification(階層化過程)というのがあるわけです。

これが常に同じように動いていて、後期が来て、やがて晩期が来るというシナリオは否定しようがないところまで来ているので。縄文時代を一括して、平等社会理論でやっていくのはもう難しい。むしろなぜ変わったのかという先祖祭祀を中核として、儀礼や祭祀はものすごく重要な役割を果たしたというのが中期後半から後期の大きな文化現象で、谷口先生はずっとそれを専門にされています。そこを理解してください。ここで大きな社会変動があったからこそ、逆に弥生時代につながっていくのです。

今のようなSDGsに対応する形で、表の右と左でほぼ対応するように整理すると、相当

古い考えを入れることになりますので、ここは是非新しい見識に立って欲しい。それが私からのお願いです。

(中村委員)

無難に全体をまとめていると思いました。一つは、前回私が主張した未来志向を出してもいいのではないかと話したのですが、恐る恐る入れている感じがします。

背景には、今の議論のようなものがたくさんあるのかなと思います。

SDGs に関することは細かい部分を読んでいなかったのですが、8 ページには「①保存活用の歴史が持つ適合性」と「②縄文文化の適合性」ということが大きな2本柱として書いてありますが、これが今一つわかりません。この2つは、細かい目標設定の前提ですから、もう少しきちんとまとめられないかなと。

適合性という言葉を使っているけれども、①は「歴史から学ぶ未来」だと。「SDGs とともに学ぶ」と。②は、SDGs はサステナビリティという言葉がありますが、縄文文化を学ぶと持続可能性は、一つの学ぶべきところとして大事で、そういうところで縄文文化の持続可能性ということがあるのかなと。

「過去から未来へ」という考えと、「縄文」というサステナビリティをここで書かれているのかと思いますが、その辺はちゃんと煮詰めた方がいいです。

「LIVING JOMON」の言葉は悪くないけれど、日本語的にどういう意味かを示していく必要があるかと思います。外国人にこれで通じればよいのかもしれないけれども、日本語にすると、「生きている縄文」ということですが、生き物は **Living Things** と言いますが、縄文が生きているんだということをこの英語で示したかったのでしょうか。今に生きる縄文であるし、それが未来に生きる縄文ですよと言いたいのであれば、吟味して、日本語を併記する必要があるかと思います。

過去未来へということだと、**Back to the Future** ですが、「JOMON BACK TO the FUTURE」でしょうか。

いずれにしろ「LIVING JOMON」はスローガンですから。この日本語の検討も必要だと思います。

(設楽副委員長)

新型コロナの影響もあり、深く事務局で詰められていないこともあると思いますが、本日の案はかなり我々の主張を盛り込みながら改定していただいたと思います。

前回も挙がっているSDGs ですが、これも盛り込んでいただいてよかったのですが、高橋先生からご意見ありましたように、確かに無理やり結び付けた印象があります。

これは、SDGs 自体が国連の提案ということで、現代社会と未来のつながりを表すのにと苦勞して立ち上げているので、不平等や気候変動、自然環境など重要な考えが盛り込まれています。

ただし、だからこれは過去に素直に投影できるものではないわけです。

我々は、過去を考え、現代を考え、未来を見通していかないといけないので、SDGs の

目標、挙げている項目は活かしながら、縄文時代をどう考えていきましょうか、加曽利貝塚の分析によって過去がわかりますよね。それを現代と未来を考えるための展示なり、研究していく指針として活かしていけばいいのではないかと思います。

ですから、SDGs の註にも SDGs がこういうものだと挙げておくにとどめて、9 ページから 10 ページにあるような対応表は無くてもいいのかなという気がします。

確かに、縄文社会は単なる平等社会ではありません。では、平等とは何なのか、縄文時代は平等ではないとするならば、資料としてどう示されるのか。先程、西野所長から千葉では階層化の傾向が見づらいというお話がありましたが、それはそれで私はいいと思います。

では、平等の問題をどう考えて、展示としてどう示せるのか。

環境気候変動の項目は、非常に大切です。縄文中期から後期にかけて、寒冷化が生じて、それによって集落の変動が非常に激しくなっていく。

加曽利貝塚の北貝塚と南貝塚の違いは、まさにその時期になるわけです。そのため、これもまた、加曽利貝塚を考える上では重要ですし、海と陸の資源の問題は、非常に重要な問題です。

ですから、8 ページの縄文文化の適合性という言葉がいいかわかりませんが、ここには、もう少し絵をかいてください。

この部分は、それに即して総括的にまとめられていると思いますけど、もう少し問題意識を明確にしてください。今の素案は、環境の問題があまり触れられていないし、それからジェンダーのことも触れられていない。そういったいくつか重要な点があると思います。

いわゆる持続可能性ということであって、1 万年以上続いた非文明社会ですし、それがなぜ長いこと続いているのかというのも大変面白いテーマだと思いますので、まずそのところにそれをうたって、縄文人はというところにつなげてはどうかと思いました。

その前段としては、非文明社会でありながら、1 万年以上にわたって続くこと、それから環境の問題としては自然環境に適応して自らの社会を組み立てたり改変したりしていく。そういう長期にわたる持続可能なことを、もう少し強く最初にうたっていいのではないかと思います。

それから、SDGs で「自然と調和・共存」という言葉が 15 ページに出てきます。これは主体性があまりないかなと。縄文人が自然に埋没して一緒に暮らしているような感じがしますが、高橋先生もおっしゃったように、縄文人は森を切り拓いて、いろいろ開発しています。

そういう縄文人の主体性を、「縄文人と自然の適応」といった方がいいのかもしれませんが、そのあたりを少し言葉の工夫をしていった方がいいのかなと思います。

もっと大きな問題が、現状の縄文研究に則した 36 ページ。後で議論になると思いますが、展示のコンセプトですよね。それが前回と変わっていません。この部分をもう少ししっかりと考えていただければと思います。

(谷口委員)

SDGs に関する 8~10 ページには、私も違和感を持ちます。高橋先生と設楽先生の意見もありましたので繰り返しますが、加曽利貝塚の調査研究を加曽利貝塚博物館が発信していくことが、SDGs で目標としていることとマッチしているという提示の仕方ではないのだと思います。

現在の書き方では、SDGs 自体がそれぞれの展示の基本方針のようになりすぎてしまっていて、本末転倒にならないようにしていかなければなりません。

(赤坂委員)

最初に記載されているからかもしれません。

(谷口委員)

前回の会議で一番私が主張したかったのは、縄文時代は原始時代だというこれまでのイメージを助長するような展示になって欲しくないということです。

とくに、加曽利貝塚は小学生もたくさん見学に訪れるところですから、新博物館の展示も、原始時代をさげすむような論調あるいは、縄文人が「原始人なのにこんなことができているね」というような論調で紹介することはやめて欲しいということを申し上げました。

そういった主張は、あまりこの素案に十分に反映されていないと思います。東アジアのレベルでみても、東日本の縄文文化の発達ぶりは特異だと思いますし、こんなに独特な新石器文化というのは周辺地域にもないと思います。

何故そうなったかというのは非常に不思議なところですけど、環境が良くて資源が豊かだということだけでは説明できないと思います。確かにそういう土台があったから、持続的発展が可能になったとは思いますが、やっぱり縄文社会の基礎力というか、縄文社会の仕組みが非常に重要で、それがあってからあれだけ活力ある文化の発展が可能になったんじゃないかと思います。縄文人とは自然の資源を採集しているだけの存在ではないのではないのでしょうか。そう考えないと、例えば朝鮮半島の新石器文化と東日本の縄文文化の違いは全然説明できないと思います。

もちろんわからないことがまだいっぱいあって、全てをこの博物館で、「縄文文化の真相はこうだ」ということを示しきることはできないと思いますが、博物館の重要な機能として、研究機能があるわけですから、そこで研究して出てきた問題を都度発信していけばいいのではないかと思います。研究を継続して研究拠点にしたいというのはこの素案の基本方針になっています。

今の案では、縄文時代のイメージが古い形で固まっている感じがしています。それでは、せっかく作る新博物館が台無しになっちゃう、とまでは言いませんが、何を刷新していかなくてはいけないかという、縄文人の食生活とかそういうことだけではいけないと思うわけです。

(中村委員)

縄文文化という言葉がありますが、自然と人間の関わりはどうでしょうか。私は人間中心

の思想は分かるけれども、自然の中の一員という生態学の立場で見ると、原始的なイメージを払拭しなければいけないという時に、私は「縄文文化の特徴として原始的でないもの」ということが、委員の皆さんが何を意図しておられるかがわからなくて。

どういう状況を払拭して、どういうイメージをアピールすると考えればいいでしょうか。
(高橋委員)

決定打は誰も答えを出せませんが、こうして今話ができていることは、みんなが科学的な知識を持っていて、合理的な判断ができるようになってからです。これを日本人ができるようになったのは、実は明治時代以降です。

それ以前はどうだったかという、例えば近世の記録をみると、大変な病気になった時に何処に連れていくかと言うと医者ではなく祈禱師のところに連れて行って、呪文を念じて病気を治したという事が山ほどあって。科学的な知識がなかった分だけ、よりプリミティブと言っはいけないけれども、そういった伝統的な呪術あるいは伝統的な世界の中で補ってきた経緯があります。

これは日本だけではなくヨーロッパも、そのような近代的で合理的な科学的知識が広まったからこそこの様に我々が会議を開けたのですけれども、産業革命のあったイギリスですら、魔女裁判とか、絞首刑とか山ほどありました。

それは元を辿っていけば、日本もそうですが、縄文時代まで遡るような伝統知であるとか世俗知です。

そういったものを一括して、プリミティブあるいは原始的と言っはいけないということが、最近の我々がそう言う意見です。縄文人をそう言った言い方で卑下するのはやめよう。何故かという今同じような状態の人が実はアフリカにいるじゃないか。パプアニューギニアにいるじゃないか。彼らを同じような言葉で卑下するのか、という反省があるんです。

だから、そういう伝統知という言い方で理解していただいた方が、我々としては入りやすいです。

(中村委員)

「伝統文化」ということは、いいわけですね。

(高橋委員)

そうですね。

(中村委員)

縄文文化はどういう言葉かという、一つは我々からすると自然と人間の関わりの中で生まれてきた *culuture*、*cultivate* というのは主体は人間であって、耕すのは自然なんですよ。そのインタラクションで出来てきたのが *culture*、文化という言い方もできると思うんです。

だからそういう意味では、カルチャーとサイエンスの関係を少しずつ醸成していけば、それはそれでサイエンスにつながるわけですね。

(高橋委員)

誤解を与える言葉を使ってしまった私の間違いかもしれませんが、人間が、縄文人を含めて自然と対応関係でやって来なかったというのは、誰も考えていませんよ。

むしろ、自然と対応関係の中で、例えば生態的关系を築いてきて、それがずーっと今日までつながってきて、逆に言うと、今からずっと縄文時代に遡るような、そういった対応関係が常にあったわけです。

それ以降、社会が複雑さを増すごとに自然と人間も対応関係の中で、新しい未来に取り組む、あるいは、それに社会的に反映する、あるいは文化的に反映すると、ずっと繰り返してきたんですよ。

今、我々は科学が発達した時代であっても、自然環境と対応抜きでは有り得ないですよ。そういう意味では中村先生のおっしゃるとおりです。

ただ、私が言っておきたいのは、海との対応関係で縄文人は、生業だけでやってきたぞとか、そう思って言っているのではないのです。むしろ、それから、文化・社会がどのように構築されてきたか、ということの方が、今回加曽利貝塚を見るうえでやっぱり大事と考えるわけです。単に生態じゃないですよ。むしろ、それから構築される社会がどうであったか、ということも最近わかってきたことなんです、是非その情報を入れたいなという話です。
(青木委員長)

SDGs に関して載せていただいた事を私は、とてもいいことだと思っています。ある意味、今の社会の指針になっていて、行政として、無視できない。

ただし、それは、ここにあってロゴが入っているのは大項目であって、その下に小項目、たくさんあるわけです。それで、常に私達が、こういう作業をしようとしたら、これマッピングですけれども、マッピングをローカライズしなければならない。で、これはある意味、この作業をしているわけです。ですが、実際はちゃんとやろうとすると、先程の、学問的な解釈の部分、10番とか9番とかと言ったようなところは学問的論争になりかねない。

SDGs の概念で縄文時代の考古学的研究の成果を学問的論争にするのは、これはあまり適正ではないです。

これは私、考えられるのは、SDGs に関して一つは、博物館活動と、博物館施設は現代的社会の中で行われているわけですから、将来・未来につながっていきます。それが、今、作っているSDGs の概念の中にどのように適合して、どう取り扱っていくのかという位置付けを明確にする。ということと、二つ目は、展示の問題だと思うのです。展示の問題にはどうしても学問的な問題も絡めて、相当、議論しなきゃいけないと思います。

ですから、展示に関しては、ある程度SDGs の概念を入れて考えるというようなこともあるかと思いますが慎重にさせていただければと思います。もしくは、基本的には博物館活動として、あるいは施設として、SDGs をどういう風にとりこみながら、持続性可能性と環境問題をクリアしていこうかということを明確にする様なところで考えたらいいかと思うのですが。設楽先生、どうですか。

(設楽副委員長)

これを、展示の中にどう活かすかということですよ。

(青木委員長)

それをまさに専門家同士で、相当議論していただかないといけない。

それこそが多様性ですから、SDGsの目指すところだと思いますけど。

(設楽副委員長)

先ほど谷口先生がおっしゃったとおり、これありきではなくて結果的にこういう重要な問題が、縄文の加曽利の研究で出てくるということではないかと思います。

(中村委員)

要するに、ここで答えを示すのではなくて、こういう視点でもいろいろ議論していきますよというぐらいで私もいいのではないかと思います。

(青木委員長)

実際結論が出る話ではありませんので、今の中村先生が要約してくれたラインで素案をまとめていく形でどうでしょうか。博物館にソーラーパネルを置くかわかりませんが、そういうこととか、あるいは博物館の活動の中で持続性をいかに持たせていくかという議論については相当クリアにできると思いますが、学問的議論になる部分については、クリアにできるはずがありませんので、議論を重ねていきながら何らかの形で展示に生かしていただければと思います。

(高橋委員)

SDGsの表の右側に、「目標の設定」という言葉がありますが。

(青木委員長)

これはSDGsの言葉をそのまま使っているので、言葉はよく議論していけばと思いますが。

(高橋委員)

これを無くして言葉を換えれば、相当柔らかくなるのではないのでしょうか。

(中村委員)

それはありますね。目標の設定というタイトルにしない手はあります。

(高橋委員)

これはSDGsの言葉でプロパガンダがあって、それに見合う目標があるぞ、その設定は縄文時代ではこうなるよと言っているようなものだから、それはやはり違和感が出るのは当然だから、目標の設定という言葉を他のものに変えて、文章を直していけば、合うような気がします。言っている内容そのものは決して間違いではないので。

(赤坂委員)

何ができるか、という感じでしょうか。

(青木委員長)

他のところもそうですが、基本計画の素案ですので、ここには博物館評価の問題は出てこないですが、博物館を作れば博物館評価をしないといけないので、それはやはりこういう基

準があった方がいいのではないかと。博物館評価に耐えやすくなると。

博物館評価のことは我々が議論することではないのですが、少なくともこの計画の中には、それをクリアできるようなセッティングはしないといけないと思います。SDGsがそういうことになるなと思います。だからそれは評価の問題は別ですけど、評価がしやすいような、評価基準が明確になるようなものをきちんと置いておくといいなと思います。

(高橋委員)

先ほど設楽先生と谷口先生がおっしゃったように、SDGsの個別の事実関係と結び付けようとするとう無理が出てくるのは同感ですが、大局のスローガンは大事なので、どこをどう兼ね合わせていくのかということを見る巨視的なテーマでやってくれた方が、博物館としての位置づけがはっきりしてくる。縄文の個別テーマと結び付けると妙なので。

(青木委員長)

もう1つはSDGsを打ち出した博物館は初めてなので、今後、SDGsのことを博物館も考えざるをえない時代になりつつあるし、特に国際協力の場面では避けて通れませんから、遺跡の環境評価と併せてですけど。

それを先取することは必要だと思いますし、全部先取る必要はなくて、私たちが飼いならせる程度のところで考えたらどうでしょうか。

(中村委員)

SDGsと合わせて、箱モノとしてソーラーパネルや湧水の利用とか、普通そのレベルの記載なんです。だけどSDGsの関わりは研究テーマとして、縄文を探ることによって、この中身を詰めるんだという態度はこの博物館としてあってもいいと思う。博物館の建物の話として普通は終わるけれど。

やっぱりその西野所長の仮説みたいな、サイエンスは仮説・検証のプロセスが基本ですから、きちんと仮説も提示する態度でSDGsを見ているという、まさに博物館とSDGsの関わりをやって欲しいなと思います。

(青木委員長)

今、委員の皆様の方向性は、共有させていただいたと思いますので、そういう方向性で少し西野所長もご検討ください。

(設楽副委員長)

私は、SDGsはよく存じ上げなかったので、委員長からとくに評価と絡むということで大事だということはわかりましたし、9ページ10ページは無くてもいいじゃないかと申し上げたことは撤回いたします。

目標設定とかコンテンツは書き改めて活かしていただければと思います。

(青木委員長)

ではそういう方向性で。もしもご意見があるようでしたら、別途事務局へメモでも構いませんのでよろしくお願いいたします。

(赤坂委員)

原始時代の恰好に関する結論が出ていない気がします。

(青木委員長)

L I V I N G J O M O N や、J O M O N I A の理解ができない。縄文文化の世界観など過激な言葉が出てくる。縄文文化の価値判断をするのは私たちなのですが、文章を読むと、縄文人たちがそういう世界観を持っていたように読める。

(谷口委員)

博物館展示の話に入る前に基本的なことをもう一つ指摘します。前回の会議から時間がだいぶ経ってしまったのですが、今の検討は新博物館の中身の話ですけど、史跡整備の話と全く無関係ではないですよ。史跡を博物館の活動の中で活用していくのは当然必要ですし、史跡の景観をより縄文的なものに改修していく計画もあると思うのですが、博物館は見学者が博物館だけ見て帰ることは想定していないと思います。史跡にも見学ルートがあって一体的に活用されると思うけれども、今の素案は博物館の展示のみの内容なので、史跡と博物館の関係についての考えが希薄です。それをどのように考えているかをお聞きしたい。

(中村委員)

私もそれは感じました。コアエリアだけに限定している話になっていて、周辺環境の関連などが抜けているかなと。

(設楽副委員長)

16 ページの(2) に収集・保存がありますよね。基本方針の中に活用と出てきますが、私は、ここは収集・保存・活用だと思います。

これは資料の調査研究それに活用。谷口先生がおっしゃったのは遺跡の活用ですよ。そして出土遺物の活用。だからこのあたりに遺跡をどう活用していくのかを理念として示した方がいいのではないかと感じました。

(青木委員長)

史跡と博物館の関係を谷口先生はご心配していたと思いますが、事務局はこれは博物館の基本計画なので、史跡と博物館との兼ね合いはグランドデザインなどで謳っているからあえてここでは抜かしているという理解を私はしたのですが。

(佐久間課長)

おっしゃる通りです。ただ、今ご指摘を谷口先生から受けたものは、4 ページ 5 ページあたりに考え方としては新博物館の位置づけはお示したつもりですが、全体としては平成 28 年度に保存活用計画をつくって、全体の方針をグランドデザインで示して、今回はハードとしての機能の新博物館の計画を立てるとというのが 1 番の目標で、青木先生のおっしゃる通りです。

(青木委員長)

史跡との関わりが希薄になっているので、もう少し関係性を持たせる文書を追加していただくということでよろしいですかね。そうしましたら谷口先生からももう少し意見をいただいて、見直すということで。

(谷口委員)

例えば、20ページに集客交流イベントとありまして、こういうところで史跡及び縄文の森のスペースを利用していろいろやると。これだとイベントの会場みたいな面しかみえない感じがします。

でも、史跡そのものが野外展示という性格もあると思います。館の中で縄文人が堅果類をどう利用したかを展示して、堅果類が用意されていて、それを館内で潰したり粉にする体験もあるかもしれないけど、では、ミズナラの木がどういう木で、実がいつ頃なって、どういう風に収穫できるというのは、やはり史跡のそばにそれが植栽されていて、その採集や観察と合せてやると違ったものになるのではないかと。

復元された住居も、公園ではなくて野外展示の機能を果たすべきものだと思うので、それは博物館展示でどう一体的に利用して行くかというのを計画の中に具体的に盛り込んでおかないといけない気がします。

(青木委員長)

全体を読んで、没入コーナーでの体験はよく書き込まれていますが、遺跡の中の体験は薄い。遺跡の中にも体験学習施設ができるのに、その関連性がこの中にほとんど出てこない。谷口先生と同じ内容かもしれませんが、この計画の中に書き加えて欲しいなと思いました。

フィールドで行う体験が、博物館活動の中で大きな比重を占めるとは思いますが、そこら辺を博物館施設の基本計画のなかにどう入れていくか。それはまた別個ですよということもあるかもしれませんが。実施計画を作らなければいけないので、それは実施計画で反映させていくということを基本計画の中で何らかの形で担保をとることもあり得るのではないかと思います。

(高橋委員)

おっしゃる通りだと思います。谷口先生がおっしゃったとおり、確かにこの部分は博物館に特化していて、貝塚全体や植生のことは落としにくいと思うけれども、それはわかったとしても、ある程度見せ方が足りない。ピックアップできるので、そういうものを入れていけば、相当内容が違って立体的に見えてくるので。

15ページ以降に普及活動の展開で調査研究部門および資料の収集保存と活用の2つに分かれていくのですが、調査研究の視点で見ると、加曽利貝塚の調査・研究は加曽利貝塚の全体図の究明というのはよくわからないし、さらに加曽利貝塚がまた出てくる。あまりにも加曽利加曽利して。

加曽利貝塚だからそれでいいだろうというのではなくて。加曽利貝塚って貝塚そのものが大事なのか、いや貝塚も大事だけど貝塚の下には集落が出てくるぞ、そういうのはどうするんだ、ここに出てくる土偶や石棒はどうするんだって言った時の具体的な提示がここに何一つありません。なので、実に読んでいて貝塚と加曽利貝塚という言葉はやたらに出てくるのですが、それだけで追っていいのか。これは研究テーマをきちんとやっておかないと、15ページのエの推進体制も、実にあいまいなものになってしまうんですよ。新博物館の学

芸員が基幹テーマを調査研究の役割を果たすと言って、そのあと何があるかっていうと、16ページの(2)、収集・保存とあるけれど、その下を見ると2行目、埋蔵文化財調査センターと分担して適切に保存しますと出てきて。調査研究部会でうんと議論した、その分野の専門家・研究職が担当するのではないのか。

よその博物館のように、学芸員がある時は発掘して、それで市内の調査もやって、また博物館に戻ってきて、加曽利貝塚の調査もやって研究もやって、4、5年のローテーションの中で、立派な博物館が可能なのかと。ここはやはり専門職員としても研究者を入れるべきではないかと議論してきたけれども、この辺のメイン研究と、事業活動の展開の中で、具体的なテーマに欠けるような気がしています。もう少し具体化していくうちに、どういう研究が可能なのか、逆にどういう視点を作らなければいけないのかが見えてくると思う。ちょっとあいまいなところが多いと思う。全体像や性格や特徴だけではなくて、これは宗教や信仰はどうか、儀礼や祭祀はどうか、加曽利貝塚の今はっきりしてきた事実関係の中にも、いくつかピックアップすべき議論もあるので、そういうのを書いていかないと、何が縄文文化なのか、何が縄文社会なのか見えてこない。これはある程度明確に描いた方がいいのではないかと私は思います。

これはこれからゆっくり煮込んでいくのか。だから今ぼかしているのか。

(青木委員長)

組織論の問題は、私の感じだとぼかさざるを得ないと思う。具体的にどこに何人配置するかとか。どうしても生煮えのことになると思いますが、研究テーマは明確であってほしいと思います。

(高橋委員)

ここの研究テーマは明確に出して欲しいですね。

(中村委員)

科研費の研究機関は目指すのか目指さないのか。

(佐久間課長)

それは50ページの部分です。すぐにできるかはわかりませんが、研究型の博物館を目指すということは謳っております。

(青木委員長)

それでいうと、文書全体を私たちが理解しやすいように構成していただければということと、全体のことですが施設計画の28・29ページに室名が出てくるのが、文章中のどこにあたるのかが表記の仕方が違って理解できない。これは改めて図でも描かないとわからないです。機能、目的とどう連携するのか。それは後で整理してください。先程赤坂先生がおっしゃった、言葉がバラバラというのと同じですが。

(赤坂委員)

段階を置きながら、ということですかね。

(青木委員長)

公開承認施設を取りましょうというのは大賛成です。そうするとある程度博物館のクオリティが保証されますし、重要文化財が展示できれば集客にも良いでしょうから、是非公開承認施設は取る方向でまとめていただければと思います。

(設楽副委員長)

先ほどの谷口先生のご発言に戻り、野外展示という概念ですが、これは非常に重要なことです。

どうしても展示というと屋内に資料が並べてあったりジオラマを思いますが、史跡を野外展示として。

(谷口委員)

やはり史跡の側にあるわけですから、野外展示という位置づけにした方がいいです。

(設楽副委員長)

そうすると事業の展開 17 ページの (3) 展示・体験も、野外展示という項目を設けて、それを位置づけていった方がいいかと思います。活用の一つとしてイベントはあり、それも大事なことでありますが、研究成果の根源となる史跡ですので、その重要性を是非示してもらって。かつそれが一番重要なものです。

(谷口委員)

大まかな考え方は示されていると思います。中心の新博物館と特別史跡のコアエリアを行ったり来たりするのが述べられている。具体的にどういう内容にするのかは、博物館構成を考える際にも、もう少し具体的に考えた方がよろしいのではないかと思います。

展示の話にこれから入ると思いますが、北貝塚の真ん中に立っている鉄塔の問題ですが、かなり難しい問題だと思いますが、縄文時代の景観が体感できるのが特別史跡加曽利貝塚の最大の魅力として位置づけられているわけですから、縄文的景観を台無しにしているあの鉄塔は、せめて駐車場のあたりまで移動できないでしょうか。北貝塚の真ん中にあるわけですから。

(赤坂委員)

永年の悲願ですから。

(高橋委員)

昔の調査で実施した測量も、測量用の磁石が振れて曲がるくらい強力なので。

(青木委員長)

それは前の保存活用計画でも、将来的には撤去する方向で動きますとまとめたと思います。

いつ実現できるかわかりませんが、皆さん問題意識は持っていて、撤去するのは公約だと認識しています。

(谷口委員)

議事録に残していただければ。

(設楽副委員長)

遺跡にはどこでも皆建っているんですよね。不思議なことに。

(青木委員長)

私たちは今後もそれを実現していただくようお願いしていくということです。課題がたくさんあって大変だと思いますけど。

(赤坂委員)

展示の39ページにJOMONIAが出てきます。下の表の左がJOMONIAの室内展示だと思います。右が屋外・史跡内と書いてあります。JOMONIAの中身が決まれば、対応する屋外も決まっていくということによろしいですか。

14ページのLIVING JOMON、ネイティブチェックをして、Step Into The Jomon Era、Experiens Jomon が示してありますが、ほかには、Living Through Jomon くらいかなと思ったのですが、今日中村委員の説明を聞いて、全部それがすっ飛びました。まさに生きている縄文で、LIVING JOMONでいいんじゃないかと。

これは今に生きる縄文といってもいいですし、縄文は生きていると言ってもいいかもしれませんが、重みのあるテーマなのだと今日認識を改めました。そうすると下の4つの箱がいかにも軽くて。もう少し、しっかりとしたものにした方がいいのではないかと。

(高橋委員)

LIVING JOMONは、中村先生がおっしゃった訳が一番正しいと思います。これを強くすると、JOMONIAって縄文が今も生きているんだよ、現代って縄文の続きなんだよという連続で捉えられるのが怖いということで、こう変えられたと思うので、ある程度言葉の意味は薄まって、これでもおかしくないと思いますけど。

(青木委員長)

このLIVING JOMONでいいということですか。

(設楽副委員長)

皆が知っている単語でないと意味がないかなと。Era はね。

(谷口委員)

もうちょっと継続して審議した方がいい気がします。

(吉野主任上席文化財主事)

LIVING JOMONですけど、文化庁の補助事業で、Living History という事業があり、歴史的事実に基づいて、例えば大名の宴会の並びやメニューなど記録に残っているのでそれを再現して体験しようと。そのためにお金を出すという補助金です。

この補助事業の名前に加曽利貝塚が似ているのは、もったいないのではないかと思います。これは保留でというのが私の考えです。

佐原の伝統地区で、伝統的な建築や建物をホテルにしてという事業展開で、NIPPONIAというのがありますが、それと似ている感じがして。似ている感じがするのがいいのか悪いのか。マーケティング的な話かもしれませんが、それは気になったので発言しました。

(高橋委員)

専門的な方がつけたのですか。

(佐久間課長)

17ページの最後、縄文にラテン語の地名を現す「-ia」を付けた造語であると示しました。

(高橋委員)

チバニアンに近いですね。

(青木委員長)

こういう言葉を使うなら、ラテン語の地名がというだけでなく、定義づけが必要ですね。

(谷口委員)

僕の恩師の小林達雄先生が以前、ジョーモネスクジャパンというのを打ち上げました。発掘して出てきた物を保存して展示するだけではなく、もっと現代の生活の中で活用していかなければいけないという発想を先取りしていて、いろいろ活動をしていたんですけど、それをジョーモネスクジャパンというフレーズで行いました。今回のLIVING JOMONは負けている気がしますね。

(中村委員)

JOMONIAは体験するところなのですか。

(赤坂委員)

屋内展示ですね。

(佐久間課長)

屋内に縄文のムラを再現したことを現しています。

(設楽副委員長)

38ページに絵が出ています。原始的な服を着ているように見えて。

(赤坂委員)

天井にあるのはプロジェクターですか。

(佐久間課長)

プロジェクションマッピングのようなものです。

(中村委員)

体験展示ということで、7ページの体験の重視というのが基本方針の柱になっているけれども、これがみすばらしいんですね。体験の重視という中身がないのと、JOMONIAがそういうことであれば7ページになくていいのか。体験ということの全体像が？

(赤坂委員)

意図としては、室内で展示したものを屋外で完全なものが体験できるということですね。

(中村委員)

JOMONIAは過去を体験することがJOMONIAで大事なこととして言いたいがためのこういう言葉なのですか。

過去を体験して何を学んで欲しいのかということが見えてこない。

こういうところに入って行って、こういう生活をして欲しいんだというのが、環境などでも山の中で体験して欲しいというプログラムがある。それは自然のすごさ、自然の怖さも含めてということで連れていかないとわからないといったりする。JOMONIAで体験する意味合いは何なのか、もう少し明らかにして、それを熟慮の上で体験プログラムがあちこちで組まれるという風にしていかないと、あっちでJOMONIA、こっちで体験になる。

その辺をもう少し統一的に体験というものを博物館がどういう風に考えるのか、野外展示の問題も含めての軸をしっかりとさせていただきたいと。

もう1つは未来ラウンジの在り方。未来志向の展示構成というのがよく最後にあるんです。それが必ずしもいい展示ではないのですが、35ページでは最後は加曽利貝塚の魅力で終わっているような形になっています。未来ラウンジと体験展示みたいに書いてあるけど、どういう風に結びつくのか。その辺が見えないので。

過去を体験するというのが未来に重要だと言いたいのですよね。だからJOMONIAをやるんだと。その辺の未来に対するというのがラウンジだけでいいのかとか。展示としては未来展示というのは失敗もあるのですよ。更新していかなければいけない。そういうストーリーを考えて未来ラウンジを活かすようにしてもいいのではないかなと。

(青木委員長)

体験の部分をもっときちんと吟味していただけませんか。というのも体験という言葉がたくさん出てきますけど、それぞれが曖昧です。博物館内の場合と野外での場合、展示でも探求型の体験、没入型の体験、それも明確ではないですし、ですからその体験のことについてどういう項目があって何をどこでするかを整理していただけませんか。

17ページの展開案は、これをいうと怒られるかもしれませんが、探求型展示の体験、考古学者の目線でというのをもうちょっと多様性がある目線があってもいいんじゃないかと思いました。

それぞれのテーマで縄文農耕の問題もあるし、それはもう考古学者の問題では済まないの

で。それから貝塚というタイトルですけど、海との縄文文化の関わりとなると考古学者だけでいいのか。ほかの展示にも出てくるので、それも検討していただいた方がいいのではないかと思います。

(設楽副委員長)

長くなりますが私の考えを。JOMONIAは、これは力が入って構成されていて、38ページの図に濃縮されていますが、実物大・等身大をイメージされている。私の乏しい経験ですが、新弥生紀行という企画展示をして、弥生時代の北海道・沖縄に焦点を当てて構成し、ジオラマを作ったんですがそれはさすがに10何分の1でつくって、それには考古学の成果をほとんど盛り込みました。

先ほどの衣服の問題なんかは難しくて、いい土偶があったのでそれから頑張って再現し

て、本当にいろいろな情報が必要で、新しく得られた辺境の文化、弥生文化の情報を盛り込んだんです。

ですから、非常に力を入れられていいことだと思うんです。研究のすべての側面が一発でここに表されているものにしないといけないし、ですから動線とも関わるんですけど、最初にこれを持ってきて、17ページの先ほどの加曽利ラボを作った根拠をここで示す。考古学だけではなく環境資源、様々な分野がジオラマには反映しているわけですから、だからそれは加曽利ラボの最新成果ですから、根拠をここで示すということにすればいい。子どもたちが食いつくわけで、さあお勉強ですよ、縄文文化を勉強しましょうでは、食いついてこないような気がするんです。なので動線としてはJOMONIAがあって、34ページの加曽利ラボから下へと線が入っていますが、上の加曽利ラボへ行って、未来ラウンジへと延びてくるような流れがいいのかなと思います。確か新潟県立博物館はそうだったと思います。

(赤坂委員)

まず体験させてからということですね。

(設楽副委員長)

クイズを散りばめていって、加曽利ラボでヒントや素材を集めて、など。

(青木委員長)

今、設楽先生がおっしゃった方向で検討していただいていいですか。谷口先生いかがですか。

(谷口委員)

はい。

(青木委員長)

JOMONIAの部分で、音とか音楽みたいなものとか、言葉とか。何も根拠がないんですけど、そんなこともできるような、仮想現実もできるようなことは、先生方いかがでしょうか。そうするとまた皆さんの考える没入体験が違ったかたちになると思うのですが。

(設楽副委員長)

確か新潟県立博物館でも鳥のさえずりとか、景観が再現されて花粉分析の結果も採用されたりしていますよね。

(谷口委員)

先ほど設楽先生がおっしゃったことがすごく大事です。考古学的にどこまで言えるのかを徹底的に根拠とともに示すべきです。なんでも面白ければいいというものはやめてもらいたい。イラストについていうと、こんな石槨は加曽利貝塚の時代にはほとんどないし、貝塚がゴミ捨て場というイメージであるし。加曽利貝塚には実はすごい数の人骨が埋葬されていたりしますよね。また、1500年くらいかけて積み重ねられる行為も加曽利貝塚の重要なところですよ。これだと間違ったイメージを植え付けちゃうことになるんじゃないかと。

やっぱり考古学的に分かってきていることを、そこへ来た人に向けて、情報を提示する側としては、考古学的な裏付けに基づいたものになるべくしていかなければいけない。この点

は基本方針にしていかなければいけないなと思います。

(青木委員長)

それはよろしくお願いします。35ページの展示ですが、館長に説明していただいてよろしいですか。前の部会で話していたので。

(加納館長)

先ほど谷口先生から、考古学的にどこまで言えるか根拠を示すという言葉がありましたけれども、今、専門職のワーキングチームで行っている作業で、実際に展示できる情報や実物をピックアップしております。

それで、こういうものを展示したいという中テーマを示し、前回、谷口先生から指摘がありました「原始時代のイメージみたいなものではだめだよ」ということは留意しております。

具体的なことでは、「後期大型貝塚とネットワーク社会」という部分は、階層化の問題ですとか儀礼の複雑化ですとかをターゲットに入れつつも、それを現実的に遺物でどういう風に示すことができるかを検討しています。

今は大テーマと中テーマしか示していませんけれども、その下にさらにどういう小テーマがあるのか、その小テーマごとにどういう遺物を展示することができるのか、具体的な実物は何なのか、写真は何なのかということをやっております。

私どもの作業は基本計画の中で大枠から下におろすというイメージで作業があると同時に、具体的な情報・具体的な遺物からどこまで積み上げていけるのかという作業をやっておりますので、今両方からやっているイメージがお伝えできればと思います。

そういう意味で、大テーマ、中テーマの文言は、当然揉んでいかなければいけない。これがそのまま展示のパネルのテーマになるということではないですけど、今そういう段階にあるとご理解いただければと思います。

(青木委員長)

今の説明を踏まえて加えるべきことはありますか。

(谷口委員)

前回、環境と人との関わりはもう少しクローズアップすべきという意見があったけれど、35ページの表を見るとまだ弱いと思います。

僕なりの見方をいうと、文化のサブシステムには三つあると思います。一つは生態。環境や資源と人の生活がどう関わっているのか。もう一つは社会、それとイデオロギーだと思います。

どんな文化にもそういうサブシステムがあって、それが全体として関連して文化を構成していると思うのですが、そうすると大テーマの区別が曖昧になっているところがあって。

「貝塚とは何か」ということは、1番目にも2番目にも3番目にもあって。貝塚がキーワードに出すぎていて、文化についての総合的な視点が曖昧なような気がします。

文化をどう見るかは研究者によって違うと思いますが、生態・社会・イデオロギーというのは絶対に不可欠な3つの視点であると思います。

(高橋委員)

世界に冠たる加曽利貝塚なので、「貝塚が」とかそこから出てくる「動物骨が」・・・というのが大事なことは当たり前なのであって、むしろそれで縄文社会がどう見えてくるのかを谷口先生はおっしゃっているわけです。確かにそれを類推する材料はあるじゃないですか。石棒が出たり土偶が出たり耳飾りが出たり。それがいろいろなコンテキストで出るじゃないですか。それから当時のイデオロギーがどうだったのかもいえるじゃないですか。

人骨がどういう形で出ているかを見ていくと、後期社会では頭位方向も違うよね、頭位方向は何だったのかということを見れば、ある程度社会的な問題が見えてくる。そういった、貝塚だけにこだわらないこと。この言葉で遮られてしまうと、その下に潜っているもっと重要な部分が見えてこられないので、貝塚ってあまり言わない方がいいのかもしれない。ある程度、具体性を持った内容で示した方がわかりやすいので、少し検討してください。

(西野所長)

まさに全体としてどういう内容にするか、我々もご意見いただきたいところです。その中で考え方もかなりずれがあると思います。

千葉や貝塚にどうしてこだわるかですが、この30年間くらいでたくさんの貝塚が壊れて、ものすごい数の集落を千葉では発掘しましたけれど、縄文時代の集落なり社会の研究に、千葉の資料は全然生かされてないと思っています。

それについて忸怩たる思いでいるので、新博物館の展示は、なるべくそういった千葉の要素を、全然使ってないところを何とかする機会にしたい思いがあります。

まずは千葉の内容や展示にこだわるということではなくて、あるものでどういうことが見えてくるかという到達点みたいなのところまではまず出すと。その上で研究を進めていく。

本当に研究が全然できていないので、そのあたりをやっていくっていうところまでできれば。そういう場所であればいいなと思います。

(青木委員長)

その方向としては皆さん意識を共有していると思いますので、それで基本的なことで申し訳ありませんが、29ページの展示・体験部門は、常設展示1、常設展示2、常設展示3とわけていますけど、それで2はJOMONIAとなっていますけど、遺物展示は1だけですよね。そこで今、西野所長が言った加曽利貝塚の部分だけではなくて、縄文社会を理解してもらえそうな展示にプラス加曽利貝塚の展示というかたちでやるのか、それとも1の常設展示のところで縄文社会はどういうものかを理解してもらって、それで未来ラウンジみたいな形に加曽利貝塚の縄文社会の中での位置づけというのを明確な展示をするという形で基本的にそういうコンセプトをするというのはどうですか。それがスペースの問題にも関わってくるというので。

(西野所長)

加曽利貝塚の資料をどうするかは、すごく議論になりました。例えば、千葉県内を中心にいろいろなところを扱っていく中で、加曽利貝塚をいろいろなテーマに散りばめてしまう

と、すごく弱くなってしまうし、加曽利貝塚も見えなくなってしまうので、今のところの案としましては、加曽利貝塚の資料は、別のかたちでガイダンス施設の方でまとめていく案になっています。

(森本)

ガイダンス施設は29ページの下から3つ目のところに、史跡ガイダンス展示室というのがありまして、こちらに加曽利貝塚の出土資料を基本的にまとめて展示をしたいと考えております。

どちらかという博物館に来た方のうち、貝塚を見に行くのがメインの方々は、ここで出土資料を見て史跡に向かって見学をするという形ですね。

(青木委員長)

では、常設展示の①で縄文社会が理解できるような展示をして、それでJOMONIAはJOMONIAで、未来ラウンジはここで書かれているとおりで、史跡ガイダンス展示室で加曽利貝塚に特化した展示をするということですね。

(設楽副委員長)

それは分散してしまう気がします。私はJOMONIAで先に引き付けてという案をお話ししましたが、JOMONIAの再現はもちろん加曽利貝塚を念頭に置いているわけで、加曽利貝塚から復元すると。

それならばその根拠になるものを展示で示していくということだと、35ページの縄文の表の縄文のムラと暮らし、これが一番JOMONIAの根拠となるわけですね。それが中テーマは加曽利から出土しているものだけで説明ができないのか。イヌの埋葬とか。

(西野所長)

イヌの埋葬は出ていますが、この展示はむしろ千葉県を中心としていいものを選びすぐったものを加曽利にこだわらずそういう方向で考えています。

(設楽副委員長)

いいものを多少持ってくるにしても、ここを加曽利で構成できないでしょうか。

(加納館長)

厳しいですね。加曽利の遺物だけでは。あまり。

(設楽副委員長)

土偶も出ていますけどね。また、先程の谷口先生の意見で、環境、生態とはまさに生業と非常に密接にかかってくるでしょう。それと社会とイデオロギー、確かにそれは3つの要素としてあるけれども、それが重複したり重層したりしますよね。

つまり、集落の中でそういう検証をすれば、遠いところの間でも、例えば貝輪を流通させるとか、そういうことで集落の中に使っているものが拡散していくと。ですから展示はやはりわかりやすく構成した方がいいと思います。

それでいえば、35ページの案は、「縄文ムラの暮らし」でミクロな目で生活を扱い、そして「貝塚と縄文社会」へと広げていくというわけで、これはネットワークとも関わる。従

って、先ほどの西野所長がおっしゃる、貝塚は加曽利貝塚だけではない千葉県のいろいろな貝塚があれば、やはりネットワークですよね、そこへと話が展開していく、さらに日本列島全体の貝塚あるいは世界の貝塚という。

だから、順序としては最後の加曽利貝塚の魅力を置いておいたとして、「縄文ムラの暮らし」それから「貝塚と縄文社会」、そして「貝塚を知る」というのが動線としてもふさわしいのかなと思います。

そうすると、ここと言えば「縄文ムラの暮らし」、加曽利貝塚だけで構成できれば一番よいに越したことはないなと思うけれども。足りない部分の資料は少し借用するにしても。ここを加曽利貝塚のメインにするのはどうでしょうか。

(青木委員長)

では、ここの部分は今の方向性で見直していただけないでしょうか。ここは加納館長や西野所長の方では今の方向性で見直して欲しいとお願いしましたが、ご意見はいかがでしょうか。

(加納館長)

具体的に実物資料を選ぶと同時に、テーマを実際の展示に向けて、200文字くらいの解説文を今、つくり始めているところです。

そうすると、自分たちが伝えようとしていることが、他の中テーマ解説と重なったり、不足が見えてきて、そのような洗い出しを行っていますので、今先生からいただいたご意見を踏まえて、そういう作業を加えつつ進めていきたいと考えています。

(青木委員長)

やはりこの辺の展示については基本計画案の中にある程度書き込んでおいた方がいいと思います。そういう方向性で内部でも議論を重ねて見直していただけないでしょうか。

(高橋委員)

南貝塚と北貝塚をあわせて展示、解説することになるでしょうか。分散するとあまり資料がないという話になるかもしれませんが。ご存じのとおり、北貝塚と南貝塚は成立過程も要因も性格も全然違いますよね。去年発掘した大型住居も踏まえて、大きな違いが出ていることの説明はどこかに入れておいて欲しい。一つにまとめてという議論はやはり乱暴な気がする。それが分かるのは加曽利貝塚しかありません。それは大事なことです。

(設楽副委員長)

高橋先生のご意見で、35ページのところ、「貝塚と縄文社会」の中テーマ、中期大型貝塚群と内陸集落群、そして後期というのを後晩期にしてもらいたいのですが、どうでしょうか。

「後晩期、大型貝塚とネットワーク社会」というところで、その性格の違いまで踏み込むようなことかなと私は読んだのですが。

(高橋委員)

大きくここで分かれていけばいいかなと。

(中村委員)

先ほどの生態・環境と社会、イデオロギーという議論はその通りだと思います。その一体的なものが、時代で変わるわけですね。

何で変わるのかと、それが分かるようなかたちにして、それが弥生時代につながるとか現代につながるとか、そういう一体性がどういうものなのか。とくに現代と比べてどう違うのか。是非そういうことが分かるように、あるいはPRするような試みの展示にしてもらえればと思います。

(青木委員長)

それでは展示についてはこれでよろしいでしょうか。素案では、研究のセクションで持続的な発掘調査をすることが謳われています。そうするとその部分は、私は学芸員の人がどうのこうのというわけではなくて、発掘に伴い出土遺物が増えてきますので、将来的な収蔵のキャパシティについても何らかの形で考えていただければと思います。それは、この基本計画に載せることではないかもしれませんが。

それと、防災の話が出ていましたけど、予定地は一応0.5mくらいの浸水の可能性があると言われていましたけれど、川崎市民ミュージアムのようなことにならないように地下室に収蔵庫をつくったりしないように。千葉市でも昨年度の台風で、ホキ美術館はそれほど低い場所にあるわけではないですけども、相当被害が出ていると聞いています。

それも配慮していただければと思います。防災の部分で、施設計画に関わることで書き込んでもらおうとか。千葉県内には文化財防災の拠点がないから、この新博物館を文化財防災の拠点にしたかどうかという考えもあるかもしれません。

今、県の保存処理施設は、うまく機能していませんよね。千葉県には文化財の防災拠点がないのです。いずれにしても防災拠点にするのは、私は賛成で、皆さんも反対しないと思いますが、あり方は検討してください。

(中村委員)

4ページですが、先ほど周辺環境との関わりのなかで大変重要なのではないかと意見がありました。私の専門として聞いておきたいのは、4ページの左側の「緑地、公園としての役割」で、「自然環境の保全と育成」という言葉がありますが、これはどこが担うのですか。縄文の森などのフィールド体験と一致すると思うのですが、自然環境の保全はどこが責任をもって担当されるのかと。新博物館なのか、公園なのか。

(佐久間課長)

まだ明確な役割分担できておらず、そもそも縄文の森構想は今後の話ですので、少なくとも教育委員会だけではできないという認識は持っていますが・・・

(中村委員)

貝塚に生えている木はどうするのか。私も切った方がいいと思っていて。ただし法面の問題もあつたりするので、これはしっかり貝塚の保護と一体となってやるということをお願いしたいです。今の記載では、新博物館はあまり関係ないという形で終わっていますので、

それは気を付けてください。

それから、研究テーマはもっといろいろあってもいいのではないのでしょうか。すべてできるかわからないけれども、テーマ性は多めにあってもいいのではないのでしょうか。縄文時代における自然の関わりとか調和・共存は、古い学説と言われるらしいですけど、永遠のテーマですから。だから、その中で持続可能性をどういう形で試みてきたのだらうとか、そういう研究テーマはちゃんと入れておいていただきたいと思います。

それから、28ページで、客員研究員や市民研究員の記載があります。それは当然のことと思いますが、「研究室に外部の人が入ってくるのはけしからん」という発想があって、トラブルがいくつかあります。例えば、研究者の隣で、一緒にスペースで研究する大学のパターンもあるけれど、私は分けて外来の研究者のための部屋は作っておいた方がいいと思います。

千葉県立中央博物館では、「一切の知りえた情報を漏洩しません」と誓約書を書かせている話もあります。研究スペースを密にすると困ったことがある。だから、部屋は分けておいた方がいいなと思います。

それから、50ページの「みんなで作る博物館」をPRするのはいいですね。展示の中身も含めてこれから市民も含めて議論していく。今日の議論の延長線上みたいなものを展示に反映させたり、体験プログラムをつくるなど、私、この50ページはいいと思います。

ここに科研費の話が出てきますが、これは指定研究機関になるのとは全然違います。科研費を使うのは、共同研究であればできるので、「指定研究施設を目指す」という文言を入れないと、そのことがどういう意味なのかは誰にもわからないし、世代が変わるとそんなものは無理だよで終わっちゃう可能性があるから、今までの議論のような趣旨ならば、「指定研究機関を目指す」と書いておくべきだと思います。

SDGsは「持続可能な開発目標」と訳すのですが、「開発」という言葉が好きな人と、私みたいに大嫌いな人がいますね。

持続可能性ということを加曽利貝塚から是非発信するということを盛り込んだのはいいと思います。不平等の問題や現代の社会的な課題は、私はわかりませんが、やっぱりそういう一万年近く続いた貝塚なので。自然と人間の調和・共存がかなわないなら、そこでヒトは絶滅しますので、調和・共存したからこそ、一万年続いたということと、そのバックグラウンドとしての自然の豊かさ、その意味を上手に社会的にも共存してきたのは、私もそれは是非研究して、その内実を探って、将来に情報発信するというのはこの加曽利貝塚の使命として持って欲しいなと思いました。

(青木委員長)

SDGsの「開発」という訳は、文化財関係者には違和感があると思います。Developmentには「発展」と訳す時もあるので、いつも「発展」という言葉で使います。

(中村委員)

私も変えた方がいいと思います。「開発」はよくないです。

報告事項 「令和元年度事業報告」「令和２年度事業計画」

(青木委員長)

それでは最後に 報告をお願いします。

〔事務局説明：資料３、資料４を元に説明。〕

(青木委員長)

ありがとうございました。元年度の報告と２年度の計画を一緒にご報告していただきました。以上ですが何かありますか。

本日の基本計画案にさらなる御意見があるようでしたら７月中に事務局にメモを渡してください。

(赤坂委員)

素案中に学芸員という言葉が出てきますが、これは学芸職員ですか。

(森本)

基本的には学芸員という意味で使っています。

(赤坂委員)

わかりました。

(青木委員長)

８月中にはまた修正案が出てくると思いますので、目を通してさらに修正を加え、最後に計画案として出てきたものに私たちが目を通して、答申するということになります。時間もありませんが、よろしくお願いいたします。

(高橋委員)

今日申し上げたことは事務局でチェックされているので、それ以外ですよね。

(青木委員長)

それでは千葉県文化財課の吉野様、何かご意見ありますか。

(吉野主任上席文化財主事)

長時間ご審議いただきありがとうございました。先生方の机上に千葉県文化財保存活用大綱案をお配りしていただいております。

これは文化財保護法が改正され、千葉県が文化財保存活用大綱を作り、市町村は地域計画を作って計画的に取り組むことになりまして、昨年度からずっと作業を進めておりました。ようやく素案がまとまりまして、７月１３日からパブコメを行います。県の高梨副課長からも先生方には是非お目通しするよう指示がありましたのでお配りしたところです。こちらにつきましても何かご意見ありましたら、県文化財課までご連絡ください。

これに基づきまして県内市町村が計画的に取り組みますので、先生方にも是非ご支援お願いします。

(青木委員長)

ただいまの説明に関して、ご意見はありますでしょうか。
無いようでしたら、これをもちまして本日の議事を終了いたします。それでは進行を事務局へお返しいたします。

(児玉課長補佐)

委員の皆様、本日はお忙しい中、長時間にわたり、ご審議いただきありがとうございます。
た。

それでは以上を持ちまして、令和2年度第1回千葉市史跡保存整備委員会を閉会いたします。

——了——